

土肥 信之・岩谷 力・栢森 良二 編

リハビリテーション処方必携
運動療法・物理療法・作業療法

(B 6 判 234 頁 3,600 円 1991 年 医歯薬出版 刊)

木村 伸也

(東京大学医学部付属病院リハビリテーション部)

リハビリテーション医学における処方については、本誌でも 1990 年 4 月号において特集が組まれ、すでに多くの読者が読んでおられることであろう。その中で、処方がリハビリテーション・チームのコミュニケーション過程のもっとも重要なものであるにもかかわらず、研修途上にあるリハビリテーション医に処方についての教育を行うに際しての、適切な入門書が極めて少ないことが指摘されている。このような中で、本書のようなリハビリテーション処方の入門書が発行されたことは時宜を得たものといえる。

本書は日本リハビリテーション医学会、本誌などにてすでに実績の知られた専門医 18 名の分担による執筆である。コンパクトな本ではあるが、運動障害の基本的考え方から、評価法、リスク管理、運動療法、作業療法、物理療法といった基本的治療手技までの総論と、脳卒中、脊損、関節リウマチ、脳性麻痺、骨関節疾患等のリハビリテーション医学が対象とする主な疾患、障害についての具体的評

価法、アプローチ法、処方例といった各論とにわたって、日常のリハビリテーション診察に必要とされる基本的知識を網羅しており、リハビリテーション専門医を志す医師にとっても、また一般臨床家にとっても手頃なリハビリテーション医学入門の書といえる。

編者がその序文で「患者にどのようなリハビリテーション医学的治療をすべきかがよくわかっており、リハビリテーション治療スタッフに何を期待するかがわかれば、それが処方であり容易に書ける」と述べている。すなわち、リハビリテーション処方を出す医師には患者の疾患と障害の予後を正確に見通してリハビリテーションの基本方針を立てることができ、さらに共に働く理学療法士、作業療法士、言語療法士等のリハビリテーション・スタッフ個々人の力量を把握していることが求められる。

しかし、多くの病院・施設では必ずしも理学療法・作業療法・言語療法などの処方を行う医師が上記のような技量を持っているわけ

ではないという現実がある。このような場合でも医療においてリハビリテーションを行う以上、理学療法・作業療法・言語療法の実施の安全性や、必要性の判断としてのリハビリテーション処方は必ず必要である。また整形外科、脳外科、耳鼻科、形成外科等のリハビリテーション科以外の医師が手術後の患者等について詳細な処方を行うこともある。つまり、医師の行うべきリハビリテーション処方には様々なレベルがあると考えるべきであり、それぞれのレベルにおいて医師に求められるリハビリテーション処方の内容、方法も変化してくるのである。本書も指摘するとおり、「具体的に書くかあるいは包括的に書くかは、医師やセラピストの力量によって変わる」のである。

限られた紙数の中に多くの内容を盛り込むことには多大な御苦労があると思われるが、今一歩踏み込んで、このようなリハビリテーション処方の多様な側面を考慮して、どのような場合には詳しく処方を書くべきか、どのような場合には包括的に書くべきかというノウハウを紹介していただければ、リハビリテーション医のいない病院等で理学療法・作業療法・言語療法などの処方を行う多くの臨床医にとって、より有用な一冊となるであろう。